

な にげなくめぐっていた時計専門誌の、巻末の情報欄の小さな写真が、そもそもの出会いであった。

この美男たちは、いったいなに「こ」であろう?!

いや、顔の造作がどうというのではない。きりりとした強い目線、まっすべのびた首筋、すっと結ばれた口元から、えもいえぬ、りりしきオーラが漂っているのである。今の日本に、こんな美しい若者たちがいたとは。

背景の垂れ幕に読める文字は、「東京ウォッチテクニカム」。写真は、スイスの時計技術者育成機関 WOSTEP(ウォステップ)のパートナーシップ校である同校の、第2期生12名に対する「WOSTEP認定授与式」で撮られたものらしい。

いったいどういふ教育が、こんな美しい人間をつくるのか?

ひたすらそれを知りたい、と思っ、一歩足を踏み入れた「東京ウォッチテクニカム」は、空気がからして「ここは日本ではない」感が漂う。どこまでもクリンで、張り詰めた静かさが満たされている。「ここは日本じゃない」といふことは、学生たちにもよく言ひまかせられています」とアドミニストレーティブ・コーディネーターの羽立昌代さん。彼女自身も、時計技術者としてスイスで学んだ経験をもつ。

「この学校では、時計の技術を教えるはありますが、育てているのは、なによりも人間だと思っています。時計業界のリーダーとなる人間、およびその卵を育てるうえで、わたしたちは、日本の教育の現状と、真正面からぶちあたっているのですが」

リーダーにふさわしい技術者……って、具体的にどういふ人でしょうか?

「自己確立ができている人。そしてマニアクではなく、バランス感覚のいい人」と羽立さんは、言い切る。「時計は、0・0何ミリという世界。ある一線を越えたら時計を壊してしまうけど、そのぎりぎり直前まで可能性を試す必要があるとき、その限界の見極めは、しっかりと自己を確立した人でないと、無理なんです。自分がない人は、発展がのぞけません」

なるほど、まずは周囲と同調することが大切とされる日本の教育では、こういう人材を育てるのは難しいかもしれない。それにしても、日本でも時計技術者を養成してきたと思うのですが、日本式とスイス式の違いというのは、あるのでしょうか?

「ここへ来わずにたまってやいなさい、というのが旧来の日本式でしょうか。スイス式では、まず、基礎の段階で、理論を教えるのみま

す。なぜ、なぜ、なぜ、それをひとひととに徹底的に考えさせます。理論と技術が一体となっていて一人前、とみなすのです」

学生さんにも、聞いてみよう。白衣も板に付いた感のある、2年生の日高光詞さん(25)と、高木勝利さん(23)。ちなみに、1年生が着るのは、カーキ色の作業着である。

「最初は、水平とは何か? 垂直とは何か? ということから、徹底的にたたきこまれました」と高木さん。え? 水平って、なにか理屈があるの?

「反射する光を使って見るんですけど、影が、丸みを帯びたりすると、あ、水平じゃない、とわかるんです。一面がぴかっと光らないと」。

そういう「ぶつうじゃない見方」をたたきこまれて、次第に「時計技術者としての、目の基準」がつかわれていく、という。

「このビルだって、垂直じゃないですよ。内側に少し、曲がっている」と日高さん。おーっと、見えすぎですよ、それは!

2年間3200時間以上のハードなカリキュラムを通じて修得する成果は、5回の中間試験、最後の厳しい認定試験で試される。ストレスは感じませんか、と聞くと「ストレスは感じている暇もない。プレッシャーは感じるけど」と高

Who's who 8

11人の未来の 時計技術者



木さん。お休みの日は、どう過ごしているの?

二人、顔を見合わせて「集まって勉強をしています」と笑う。

かくして、「入学当初はあれっとした顔だった学生たち」(羽立さん)も「自分しか頼りにならない」プレッシャーをひとつひとつ乗り越え、覚悟が備わるとともに、顔つきが変わっていく。

「ここで学んで、失敗したときの考え方が変わった」という日高さんのことが印象的だった。「これまで、やってしまった」で終

わりだったけど、この学校では、なぜ失敗したのか、考える必要に迫られる」。

時計を組み立てることを通して、自分の考えと人生を責任をもって組み立てることを学ぶ。そうして獲得したりの顔は、WOSTEP修了認定証と同様、世界のどこへ行こうと、一流のあかしとして通用すると思えます。■

中野香織=文

Yuki Kano

福知彰子=写真

Photographer: Akiko Fukuchi

東京ウォッチテクニカム
〒135-0016
東京都江東区東陽3-28-6
TEL:03-5857-2308 www.t-wt.jp